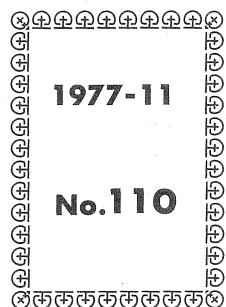


も く じ

文化行政に国民の支持を……………安嶋 彌…………4	
——文化庁長官退任に当たって——	
文化振興の条件を整備……………犬丸 直…………5	
——就任に当たって——	
* 対 談 *	
我が国バレエの将来……………6	
江口 博・服部智恵子	
青少年に芸術鑑賞の機会を……………富田博之…………12	
——財団法人日本青少年文化センターの事業——	
インド、欧州の文化を訪ねて……………山本峯生…………14	
文化庁ニュース	
文化庁の昭和53年度概算要求まとまる……………16	
昭和52年度地方文化行政担当者研修会終了……………18	
第1回芸術家国内研修員決まる……………18	
新刊紹介	
「ことば」シリーズ6「標準語と方言」、	
「ことば」シリーズ7「言葉に関する問答集3」……………19	
東京国立近代美術館特別展……………19	
——フォンタネージ、ラグーザと明治前期の美術——	
奈良国立博物館特別陳列……………20	
「伎楽面」	
フランスのフェスティバル……………長谷川善…………21	
——ナンシー世界演劇祭、芸術普及事務局	
のことなど——	
我が県の文化行政	
福島県の文化行政……………阿部信市…………23	
文化財保護法教室(12)	
民俗文化財の指定と保護……………26	
美術館・博物館・文化施設めぐり⑥	
私立で最古の大倉集古館……………30	
国立劇場ニュース……………31	



表紙 エロシェンコ像
中村彝筆
解説は20ページ参照
題字デザイン・桑山弥三郎

我が国バレエの将来

江口 博

(舞踊評論家)

服部智恵子

(日本バレエ協会会長)



—日本のバレエは一流か—

江口 このごろバレエがいろいろ評判になってきたし、海外でも活躍する人が出てきたものだから、日本のバレエは世界的にみて、いったいどのくらいの位置にあるのかとか、そんなことを一般の方が非常に気になるんではないか。

服部 このところ盛んになりすぎておりまして。そして小さいお子様方で習う方が多くなっていますね。その方がバレエの一番結果の高いところをねらって学んでいるということが。徐々にそこへ到達するというのだといふんですけども、そうでないとどうしてもおけいこの方法論とか、そういうものが一足飛びに飛躍してい

ますからね。そういう点にずいぶん疑問を持たれる方もいらっしゃるんじゃないかと思えます。

江口 森下洋子さんのように、パルナのパレエコンクールでグランプリを取ったりなんかすると、ああいう人がいるんだから、日本は世界的に第一級じゃないかなんてことを思っているらしいですね。

服部 森下さんのような方が出るのには、私たちのように、これに直面している人間にとっては非常にありがたいことですが、これがまちがって進んでいくと危険だと思いますね。たとえばマラソンで一位になっても、それが世界の水準の一位を走っているかという

江口 そのレースでは一位だったんですけれどもね。

服部 そうなんです。日本のバレエ界と海外のバレエ界をくらべてみると、向こうにはそれに対面していく、きめの細かい、おごそかな方法論というのがありますからね。

江口 それをふまえずに先のことはばかり考えて、一気に飛び越えるのは不可能なんです。そういうことをしたら、元も子もなくなってしまう。かえって危険なことになる恐れが、十分あります。バレエといふものは、積み重ねていかなければだめなものですからね。結果ができていて方法論にお

いて笑われる、というようなことも起きてきますしね。

江口 森下洋子さんがグランプリを取ったから、日本のバレエそのものが世界のトップクラスにあるというように、一般の人も飛躍して考えるんですね。バレエというのは一人でやるものじゃないんですからね。

服部 ただ森下さんが出てくれたというのに対しては、私はほんとうにうれしいです。またあの人は、外国の人たちなら持っているけれども、われわれにはまだ未開地であるものを探索しているという、非常に野心のある方ですからね。まず一位になって、これから本物になっていくという方ですね。

江口 確かに大きなステップですよ。すばらしいことです。

服部 このごろでは国で助成していただいて、われわれのバレエも大きな仕事ができやすくなってきました。おまじ、また国立の劇場ができて、そこにはめるものを長年かかって養っていかなくてはならない、これから可能になってまいりますからね。そうやってきたら本物ですがね。

江口 何となくバレエといふものは、ヨーロッパの伝統芸術ですからね。短い年月の間に日本がここまで進んできたということは、私は驚異とみえていと思うんです。しかし、だから

といって伝統を持った諸外国の一流のバレエ団なんかと日本のバレエ団が肩を並べて、毫も遜色がないかという、やはりそれはまだまだこれから先の問題だと思えます。

いったいなぜこれほどすばらしいバレエができ上がったのか。伝統は確かに伝統なんですけれども、これはいくらか逆立ちしたて直ぐには生まれるわけじゃないでしょう。積み重ねの上にできたものだからね。

その点ではいまかけ足をしても、おいそれといふ答が出るとはいえないですね。それよりも服部さんがしよつちゅうおっしゃっているように、基礎をかつちりと固めて、その基礎を正確にこなすところから出発しなければいけませんね。

服部 私もそれ以外にはないと思います。

私たち、バレエだけで基礎、基礎と思っていたんですけど、たとえばバリの、お菓子というのはすごく有名で、お菓子のいろいろな勉強にきてらっしゃる方がお話しになるのに、結果はどうしてやっても同じだといふんですね。ただ一番苦しいのは、ヘラの使い方がどうです。それに泣かされるそうです。「自分がこういうふうにしる」といふことを、おまえはやってはいけぬ、それではだめだ「こうすればきめの細かい菓子になる」といふ確信を持たなかつ

たら、それはだめだ、それが菓子を作る基礎だ」といふたそうなんです。

江口 それはバレエとまったく同じですね。

服部 やはりそれに確信を持ってくれないとね。人がいうことをやっているとだけでは、それは模倣であって、うまく自分のものにはならないといふ——そういうこと、このバレエの中にも秘められていると思いますね。

江口 それはすべての芸術にいえることでしょけれどね。でもバレエのように、ヨーロッパ芸術を日本人がこなすんですから、そこに多少のギャップはどうしてもあるんですね。それをどうして埋めていく、彼等と遜色のないところまで進めていくかということになりますと、基礎を大事にして、しかもしっかりと正確に自信を持ってやれるというところから出発しなければいけませんね。

服部 そうですすね。江口 個人個人がそこまで行っても、それからアンサンブルを理論的に、にも実際面でも固めていくことが必要ですね。見た感じだけで、こうしたいいだろう、ああしたらいだろうというんじや、それは伝統にならないんです。伝統にはちゃんと一つのパターンがあるんですからね。形のパターンと同時に、その裏づけになる精神的パターンがあるわけですからね。

——日本人はバレエに適しているか——

服部 私は体に障害がなかったらバレエはあらゆる人に適していると思うんです。最近、カイロの方とか、黒人の方でも同じバレエをなさるというところで。しかも、白人から教えられて、それをそのまま黒人がやったらおそろくだめだと思えますけど、黒人の神経のなかに人間としての一つの文学的なイメージがあつて、それにバレエの基礎がはめられて舞台芸術になったら、やはりそれはバレエじゃないかと思うんです。

服部 そう思います。外国ではバレエの伝統とバレエ自体が、あの人たち全体の誇りになっているでしょう。ところが私たちの場合は、その結果といふものが、ものすごく重大なことのようになって、最近までは結果といふものに一生懸命走つたんですね。江口 それは追い付こうとする努力の表れとして、やむをえなかったと思ふんです。だからこそ短い年月の間にここまで来たんですからね。その努力も高く評価していいとは思ふんです。

しかしそれにしてもどうですか。日本人がバレエに適しているか適していないか、というようなことも、よく素人の方にいわれるんですよ。この点はどうですか。

——日本人はバレエに適しているか——

服部 私は体に障害がなかったらバレエはあらゆる人に適していると思うんです。最近、カイロの方とか、黒人の方でも同じバレエをなさるというところで。しかも、白人から教えられて、それをそのまま黒人がやったらおそろくだめだと思えますけど、黒人の神経のなかに人間としての一つの文学的なイメージがあつて、それにバレエの基礎がはめられて舞台芸術になったら、やはりそれはバレエじゃないかと思うんです。

江口 そうそう。だから器用さ、あつたかさから、日本人の表現がでるんですね。基礎も大事ですけれども、これからの人はそれも考えてほしい。どうすればギャップを埋めて、それ以上のものが表現できるかの工夫、研究ですね。



服部 智恵子 氏

服部 そうなんです。それをがんばりだけでやると、筋肉にどうしても無理ができ、筋骨というような変なものができてくるんです。そうではなくて、基礎のあり方によっては筋肉をバレエ向きに改造し、非常に美しい脚になると思うんですけどね。こつこつした脚でなくて。

江口 なるんです。森下君がモナコでマリカ先生に教わったとき、洋子さんの脚は外人から比べて、必ずしも美しいとはいえないというんです。それは確かです。だけれども、それも正しい訓練次第では美しく見せることはできるといいます。それをどうすればいいか手取り足取り教えてくださったそうです。

だから、そういう研究、努力次第では、バレリーナとして日本人も技術以外に、肉体的にも精神的にも十分に向かうの一流に伍しける可能性はあると思うんです。そこまでやるかやらないかが問題ですけどね。

服部 そうですね。いま肉体的に美しい方が、たくさん出ておりますからね。相当な技術ができていてなおかつ非常に美しいという人ができてきておりますから、先生のおっしゃる通りに急がずあわてず、基礎を大事に自分たちが確認するようになったら、世界に伍しても行儀のいい立派なダンサーになると思うんです。

江口 その行儀ですがね、その表れとして具体的には舞台上のマナーですよ。それがまだ日本人は弱いんですね。

服部 バレエが生活の様式と離れておりますからね。

江口 生活や環境を含めての伝統の違いだと思うんですよ。

服部 そうなんです。あちらではバレエの常識が生活になつてて、日舞やなんかなる方のマナーと生活が伴つてのと同じようにです。ですから、それは皆さんにとっても大いに困難なことだとは思いますが、でも、マナーというのはほんとに教えるにいいことなんです。

江口 生活環境の反映がそこに出ていますからね。日本人はそれがないでしょう。だから、どうしてもそこそこウイークポイントがあるような気がしますが、これからだんだん日本特有の伝統ができてくると思うんです。五

十年じゃなく、もっと遠い将来かもしれないけれども、その晩には相当立派なマナーの人が、たくさん出てくるとは思いますがね。

服部 なしろバーから離れて一歩外へ出ると、われわれの生活はちよつと外国とは違いますからね。

江口 バレエをしているときはヨーロッパ風に務めていても、いっぺんけいこ場を出ると、もう日本の生活になつてしまふ。

服部 その使い分けができるようになったときは、本物なんですよ。

こういつたバレエの、自分対技術の訓練をして自分をつくり上げていくということは、自分自身の大きなプラスになるおけいこだと私は思うんです。

江口 若いときにバレエというすばらしい芸術に全精力を傾けて、一生懸命やったということは、その人にとって将来も大きな誇りになるんじゃないかと思うんですがね。たとえばバレエをやめた後でもね。

服部 お子さん方を教えてらっしゃるところでよく聞きますが、たとえば、二分間でも親の手から離れ、五つや六つのお子さんが舞台へ出て、音楽のリズムをはつきり取って一生懸命にやる心というものは、父兄の方があれが自分の子かと思うくらいに涙がこぼれるほどの力強さを感じるとおっしゃるんです。

服部 そうなんです。あんなに手をつないでなきやならないような子どもが、たった一人舞台でそれをなし遂げるということ。ですから一人の人間がものにも耐える力を得るということ、子どもにとっては大変いい勉強ごとだと思っております。

専門家になるなら別問題として、江口 日本のお子さんがスタジオの中でけいこを受けてるときは、子どもながらも一種のバレエ人になつてると言えます。ところが「さよなら」と一歩出ると、もう普通の子どもに返っちゃうんですよ。

私はそれで感心したのは、レニングラードのワガノアのバレエ学校へまいりました時ですが、廊下を歩いてみたら、授業が終わった九つや十ぐらいの女の子たちが制服を着て帰って行くんです。ところがそんな可愛い少女たちが、見も知らぬ異国人の私に、廊下ですれちがうと、その一人ひとりが一様にバレリーナが舞台であいさつするように、スカートをつまみ、腰をかがめ、ていねいに会釈して行くんですよ。ほくほく感心しました。一歩外へ出てはまだバレリーナの意識を子どもながらにもちゃんと持っているという、これが伝統だと思いました。

服部 その点やっぱリレニングラードのワガノアの学校なんかへ行きます



江口 博 氏

と、四年生のクラスの立派さというのとは普通じゃありませんからね。江口 私はひどく感激しましたね。日本人もそういうようにバレエのマナーが生活に密着してくるようにならないといけませんね。

服部 そうです。そうなら世界の方と肩を並べて、もう恥ずかしくないというふうになってくると思えますね。

——我が国バレエの飛躍のために——

江口 そうです。しかし私は非常に希望は持ってるんですけどね。

ただ、日本のいままでのバレエ界の状態からいうと、皆さんが個人個人大変ご苦労なさって、ここまで育て上げてくださったおかげではありますけれども、その限界がやや見え始めましたね。

個々の先生方が汗水たらして生徒を教え、ダンサーを仕上げ、バレエ団を

組織されて公演なさっていて、それはそれで昔から比べればはるかにレベルの高いものが出てきましたけれども、これが精一杯のいうところではないか、というような感じがするんですがね。

服部 まだ個々のおさらい会というところからは抜け切れませんからね。

江口 それ抜け切ったところというたら、ほんの二、三数える程度のバレエ団でしょう。

これをなんとか立て直さないとはいけませんと思うんですがね。

服部 私もそう思います。

江口 その一つとして、技術的な面では優秀なバレエ教師と呼んでは、えんとうに親身になって、ただ頼まれたから教えるというんじゃないで、日本人の気持ちをよくのみに込め込んで、日本人のバレエに対する考え方にしろ、踊り方にしろ、日本人の肉体的な——現在でも多少のハンディキャップはあるんですから、そういうものをふまえた上で、どうすれば日本人のダンサーをいかにダンサーに仕上げられるか、ということの研究し指導してくださるような立派な先生がきて、かなり長期にわたって教えていただかないと、いけないんじゃないかと思うんです。

服部 そう思います。その場合、外国からいらした先生方に初歩の方が教えるを受けるということは、いまま

経験してきたことから考えると不可能だと思ふんです。それよりも教べんをとおつてしやる先生方が、そういう立派な先生から教訓を受ける。自分たちの非というものは、人を教える人だとわりあいに悟りますから、そういうことから正常化していったほうがいいような気が私はするんです。フランスなんかでも、ソ連の先生がきて一生懸命教えています。ですけどほとんど専門家が習つてますからね。

ですから関係者の力によって、そういった方向をとっていただいたら、日本全国にわたっての先生方から教えるを受ける生徒さん方が、ずいぶんよくなるんじゃないかと思うんです。

その先生方の気持ち全部が全部子どもにはすなおに伝わってまいりますからね。江口 短期の講習会とかはある程度行われて、現にきていらっしゃる先生もあるし、そういう先生の指導を特別レッスンという形で受けている人が、ずいぶんいますよ。だけれども、とにかくヨーロッパならヨーロッパからきてもらって、一年なり二年なりと滞在して教えてもらうには、相当に費用がいりますよ。そこに障害があるわけですよ。そうすると、個人ではなかなか不可能ですよ。

ですから、そういう点にも文化庁から助成をしていただくくらいなことにはできません。そうして広く多くの

人がレッスンを受けられるような方法を講じていただければ、技術的にはかなり飛躍的に進歩するんじゃないかと思うんです。

服部 外国から仕事で来た人は、空いている時間に少し教えても翌日また元に戻っちゃう、それを直しても翌日もまた同じという、最後にさじを投げちゃうんです。

ですからそうではなくて、バレエは絶対こつしなきゃいけないという原則があるわけですから、それをたたき込んでいただくような、そういうことにすればいい日本のバレエが生まれると思うんですけどね。

江口 それに関連していま第二国立劇場が生まれる陣痛の悩みにあります。ね。われわれが期待しているのは、第二国立劇場の中にそういう機関を早く組み入れていただきたいということです。

たとえばオペラは国立劇場ができたときに間に合うように、すでにいまからオペラ歌手の養成をやっているんです。

だからバレエのほうも、ダンサーを養成するために外国の先生にきてもらうとか、組織的に指導して国立劇場ができた晩に日本のバレエというものがもう一段進歩したものでやれるような状態にしておきたいと思うんです。

劇場ができてから、「さて」というようなことでは手遅れですからね。

そういう機関を公式に持っていただければ、先生を呼ぶことも可能でしょうし、そこへきて一年でも二年でも勉強すれば、きちっと踊れるダンサーが生まれるということになるでしょう。

服部 オペラとバレエは向こうから見にきていただいても、さすがはいい内容の舞台があるということをいつていただかないと。

江口　そうですね。日本もバレーというものにこれだけ熱意があつてこれだけ進歩しているんだというところを如実に見せなければね。

劇場は不備だというようなことばかりですからね。本格的なものが日本にあるといつても、それは通用しないんですから。日本はあれだけ大きな劇場はあるけれども、バレエに対する設備は何も行われていないということで通っているんですからね。

江口 どうしても向こうから一段も二段も低い国のように、思われちゃうんですよ。

文化庁がどういふ構想をお持ちか、私も詳しいことは存じませんが、私も国立劇場ができれば将来あるいはナショナルバレエというようなもの、国立バレエ団というようなものを作ろうと

いうことは絶対に必要ですけれども、その反面クラシックの中にも創造性、つまり、クリエイションというものはあるんですからね。それがなければ芸術じゃないんですから。そういうものをとくと考えないといけないと思うんですよ。

いまもバリーに舞踊博物館というものが
あると思いますが、それを作ったロ
ルフ・ド・マレーという人はスウェー
デンの大実業家で、ご存じでしょう、
かつてのスウェーデン・バレエ（バレ
エ・ド・スエドア）の後援者ですよ。

その人が戦前日本にきたときに、「古典は非常に大事だから守らなくちゃいけないな。だけど古典ばかりが繁栄してある国の文化というのは、どうしてものも生まれなくてはいけなさい。その両方が競って初めてその国の文化は一流だ」といわれたんですよ。

当時私も若かったけれども、そのことばにはいまだに深く感銘してゐるんです。

服部 やっぱり古典というものだけでいつまでもいるとロングスカートで全然ショートスカートにならないといふんでしょども、古典というのをふまえていつま先生おっしゃった、そこが大事なんですね。その基礎というものは絶対変わらないで、しかもマナーの上においてショートスカートがびち

いうお考えがあるのではないかとも想像するんです。ソ連などのように幾つ

もとはいきませんから、せめて一つぐらいでもナショナルバレー団がほしいですね。そこまでいかないとけないと思うがさね。それがどうすればできるかということは、なかなかむずかしい問題もあるけれど、それを一つひとつ排除して、一番いい方法でね服部 そうなつて初めて、みんなや

——日本的なバレエの創造を——

江口　そうですね。また、ぜひそう

それからもう一つ、バレエといえばクラシックが基礎だし、それが中心になるわけですが、クラシックがそうな

つと身に付いたときに初めてものになるのですね。バリなんかでは最新の流行を追ってますけど、ちやうとしたウインドーなんかの飾りつけにも、昔の、古風な馬車なんかを置いてあって、そこに現代のすばらしいアクセサリーが調和よく飾ってあるんですね。古きものを尊びながらの現代の飛躍ともいうんでしょうか。そういう考え方もありますが、いい。われわれのバレエ芸術も絶対にそれが必要なんですね。

江口どうもこのごろは日本人の
の進歩的な人は、古いものを非常に軽
べつしますね。そんなものやめちゃっ
て、新規に何か作ろうというよう
とばかりに頭が行つてるでしよう。そ
れも一つの新しい芸術を生み出す十分
な芽にはなると思いますが、バ
ン・レーはそうはいかないと思ふんですよ
古いものを守りながら、そこから新し
い芽を出していくということが必
要じゃないでしょうかねえ。あんなに
古いとか、古典なんかいまごろな
んだというようなことをいつてしまつ
たら、もう身もふたもないと思ふん
です。

服部 そればかりやってたら進歩がなくてだめですけど、それから一つの経路があつて今日にきていますから、それを知らないではだめですよね。

たくさんあるわけじゃないでしょう。現在日本で上演するクラシック作品といったら数知れたものですよね。けれども勉強のためにはいいんですよ。いいけれども何としてもレパートリーは少なすぎたということですね。将来、技術もマンナも進歩し伝統もできてくれば、それほど遜色のない立派な向こうのクラシックに匹敵するようなものの上演も可能ではありますよ。

けれども、日本のバレエを将来も一段進歩させるためには、日本人に向く、あるいは日本的なといつていいでしょうか、非常にばく然たるいい方ですが、バレエの日本の創造ということ、が欠かせない課題だと思ふんですがねえ。

たとえばポリシヨイを見ますね、レ
ニングラードを見ますね、最近きたキ
エフにしてもそうですが、それぞれ一
種の“風”というのがあるでしょう。
それがまたあるからこそ、存在価値が
あるんですからね。

そういう意味で日本にも日本のバレーの“風”というものを、作らねばいかんと思うんですよ。これは急に作れるものじゃないけれども、将来はそこまでいかんといけなと思うんです。すわいつまでも向こうのクラシックの後を

追ってるだけでは、ほんとうの意味の芸術的進歩は少ないと思うんですよ。

服部 私もそう思いますね。一つの

江口 古典だって日進月歩してま
からね。「白鳥の湖」一つとってみて
ペチパやイワノフがやった「白鳥の湖」
を、そのままそっくり再現してるん
じゃないんですかね。「白鳥の湖」の
本はきちつと守っていても、もう八
年以上経ってますから、その間の進歩
はあるんですからね……。

しかしいろいろお話をしましたけれども、将来の日本のバレーというものに、われわれは大きな希望を持っていることは確かですね。悲観的な材料はないですね。

服部 そうですとも。もうほんとう
 によく一方だと私なんかは思つて
 おります。

江口　ことにいまのように進歩の過程にある段階だと、なおさら日進月歩であろうということは、十分に想像できますし期待もできますね。

服部 そう思います。「修業」といふことばが日本にはあるんですけど、修業には甘やかされないでもらいたいと思いますね。甘やかされたらだめになると思うんです。

江口 外国には修業なんていう考え方がないんですからね。幸いにして日本には、そういう觀念があるし、実際そういう面があるんですから、こういうすばらしいものを捨てないで、歯を食いしばってでも修業に耐えて本物になつていくという気持ちで、忘れた

古典をやっている、パリのオペラ座の人のやるそれと英国のそれと、ポリシヨイのやるそれとは違いますね。しかも共通の基礎をふまえたうえでそれぞれの「風」を持っています。

江口 いかにげんに思いつきてやつてるんじゃないくて、共通の基礎をきつと守つて、しかも「風」というものがそこに生まれてきている。それが重要でほんとうの魅力ですよ。

日本も将来はそこまで行かないことには、日本のバレーが世界的水準であるとは言えませんね。そこまで行つて初めて日本のバレーだ、すばらしいものを持っているということがいえるようになるんじゃないでしょうか。

服部 そう思いますね。ですから国立バレエ団ができたとしたら、向こうへ行つて同じ作品をやつても、日本的な精神的なものを持っていて、しかも同くそうと行儀の上においても、基礎が絶対にくずれないという。江口 スタンダードは変わらないは

ども、そこに生まれたものには、やはり日本人でなければできない「風」があるということにいけないといけませんね。それが理想ですね。私はそう思うのですがね。

服部 私も先生のおっしゃることに同感です。そこまでのいけたら大したものですね。

江口 それにはクラシックを守ると

いようにしたいものです。バレエなんていうのは遊びごとではないんですからね、昔は遊びごとだったかもしりませんけれども。

服部 先生がいろいろ生徒の自分よくなるというものじゃないんです。本人の心ひとつなんですから。本人に生まれか生まれますりかないません。だからのびもつきでやってくるの。もう見てもその人のものじゃないというのは、すぐわかりますからね。あまで自分のもの、ほんとにそういい信念で、生まれてもらったら国の宝し、われわれもこの上ないうれいしとなんです。すけどね。最近はそのうがすこし出てきてるでしょう。

江口 そうなんです。苦しみに耐えていくからこそ花が咲くんでね。そでない花はもう見る影もない花です。ほんの一日でしほむような花ですよ。

服部 日本人は苦しむのが好きな
 ですから。そしてまたその苦しみによ
 えて自分が栄光を得ることができ
 きなんです。昔からそうだと思うん
 すけどね。それを期待したいと思ひま
 す。

(完)

(完)

編集後記

○九月二十日付で、安嶋彌文化庁長官は東宮大夫に就任された。約一年間の長官在任中、文化行政長期総合計画のまとめなど文化行政の振興に大きな業績を残された。

大丸直新長官は、自ら謡曲を楽しむなど芸術文化への関心の高い方である。文化行政の一段の飛躍が期待される。

○舞踊評論家の江口博氏と日本バレエ協会会長の服部智恵子氏に我が国バレエの現状と将来を語っていただいた。この中でも第二国立劇場の必要性が出ている。現代舞台芸術の振興の拠点となるべき劇場が早い時期に建設されることを祈るものである。

(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)二六八一二四一(代表)

「文化庁月報」十一月号

(通巻第二一〇号)

昭和52年11月25日印刷・発行

編集文化庁

発行所 株式会社 きょうせい
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 〒162東京都新宿区西五軒町52番地
電話 (03)二六八一二四一(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 行政学会印刷所

定価・五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円